



残念な本

金曜日、学校から帰る途中で読みかけの本を读了してしまったために本屋に立ち寄ったところ、面白そうな本ばかりが目について、7冊もまとめ買いしてしまった。その中で最初に読んだのが、石原千秋『打倒！センター試験の現代文』（ちくまプリマ-新書）である。

この本によると、センター試験の小説問題を解くために必要な力は、

- ①書いてあることを過不足なくまとめること＝情報整理能力
- ②書いてあることを別の言葉に言い換えること＝翻訳能力
- ③書かれていない「心情」を多くの人がそう思うだろうように想像すること＝小市民的感情力
- ④出題者と物語を共有すること＝物語パターン化能力

ということになる。それぞれの詳しい内容まで書いてしまうと営業妨害になるから書かないが（笑）、なかなかまっとうなことが述べられている。ちなみに、タイトルや③の「小市民的」という言葉からも想像できるように、石原先生はセンター試験の問題をまったく評価しておらず「くだらない」とおっしゃっている。ただし、作問者が悪いというわけではなく、センター試験という制度の現状を踏まえれば選択肢式の問題しか作成できず、そうするとあのような問題にしかならざるを得ないのだろうという趣旨である。

まあ、石原先生のイタイコトも分からないではないが、それは無い物ねだりでもある。先生ご自身、成城大学に勤めていたい際に入試問題の作問をされていたようだが、「成城大学の入試問題は、ゆるやかな思想教育だっ

たかもしれない」と書いていらっしやる。私立大学が思想教育をしても許されるかも知れないが、センターが思想教育であっては困る。先生は、センター試験の思想は「よい子のなれ」だとされるが、そんなものは思想教育でも何でもない。誤解を恐れず敢えて言えば、教育は「よい子」を作るものなのである（立派な先生とは、そのことを認識しながらも、「よい子」とは何かについて常に自問し続けている先生であろう）。

さて、本の内容に戻るが、この本を読んでセンター試験が「打倒」できるかという、残念ながら無理である。例題を挙げて、①～④の解答テクが披露されているのだが、私には説得力が感じられなかった。小説でいえば、まず「物語文」を作る、評論なら要旨を一文で述べる、といったことは既に君たちにも話してあるし、それが問題を解く第一歩であることはその通りであると思うが、その後の各問に①～④を適用させて解説する部分は、赤本・青本・黒本と同レベルで、納得できない人はいくら読んでも納得できないだろう。これは、石原先生の読解力が高すぎるのと、正解を知っていて書いている感がぬぐえないからである。

悩んでいる人は藁にもすがる思いで挑戦してみてもよいが、基本「センターはくだらない」という立場で書かれた本を読んでも気持ちよくないだろうことは想像がつくに違いない。それよりも「センターってイイ問題だよね」というスタンスで書かれている霜先生の本の方が、ずっと気持ちいいし、納得できるのではないかと私は思う。